

プログラム

総合司会

あしかわ てつお 足川 哲夫 (江東区)

はたのぎんや 波多野吟哉 (荒川区)

開会の挨拶

(14:00~14:05)

城東ブロック会長

えびはらひでかず 海老原秀和 (足立区)

領域講習①

(14:05~15:05) —音声・嚥下・呼吸の談話会より—

座長：すぎやま耳鼻咽喉科クリニック院長 すぎやま ひろし 杉山 博 (江戸川区)

音声障害に対する、音声治療と外来日帰り手術による低侵襲なアプローチ
齋藤康一郎 先生 (杏林大学医学部耳鼻咽喉科学教室教授)

領域講習②

(15:10~16:10) —アレルギー・感染症セミナーより—

座長：大西耳鼻咽喉科院長 おおにし まさき 大西 正樹 (墨田区)

アレルギー性鼻炎治療の進歩

おおくぼ きみひろ 大久保公裕 先生 (日本医科大学大学院医学研究科頭頸部・感覚器科学分野教授)

共通講習

(16:15~17:15)

座長：おぎわら耳鼻咽喉科クリニック院長 おぎわら いちろう 荻原 一郎 (葛飾区)

新型コロナウイルス感染症：現状と今後

みやま 昌之 先生 (大阪大学免疫学フロンティア研究センター招へい教授 / 大阪大学名誉教授)

○休憩 10分 (17:15~17:25)

地方部会報告

(17:25~17:50)

東京都地方部会会長 かが きみたか 加我 君孝 先生

領域講習③

(17:55~18:55) —めまいときこえの懇話会より—

座長：かのう耳鼻咽喉科院長 かのう ゆうじ 加納 有二 (荒川区)

Auditory Neuropathy (Auditory Nerve Disease)

～1996年の発見報告から現在に至るまでの国内外の展開と新たな取り組み～

かが きみたか 加我 君孝 先生 (国立病院機構東京医療センター・臨床研究(感覚器)センター
名誉センター長 / 神尾記念病院)

閉会の挨拶

(18:55~19:00)

実行委員長

かのう ゆうじ 加納 有二 (荒川区)

○医療器械展示

音声障害に対する、音声治療と 外来日帰り手術による低侵襲なアプローチ

齋藤康一郎（杏林大学医学部耳鼻咽喉科学教室）

音声障害を来す多くの良性疾患において、その本質が発声習慣である。また、多少病変が存在しても、声の出し方を調節することで患者本人にとって必要十分な声で日常生活を送ることが可能となるケースも多い。

米国の嗄声（dysphonia）に関するガイドラインでも、音声治療は様々な疾患に対する第一選択とされ、その有効性は数々示されている。我々もこれまで、加齢性音声障害を含めた声帯萎縮や、声帯ポリープ、あるいは慢性化した声帯結節に対して音声治療が有効であることを発表してきた（音声言語医 2018、言語聴覚研 2019、音声言語医 2021）。これらの疾患以外にも、声帯癬痕や喉頭肉芽腫など複数の疾患で、音声治療の有効性を実感している。

さらに、外科的治療が必要な場合であっても、施術・術式は手術室から外来へ（OR to Office）、という時代を迎えている。我々も、声門閉鎖不全を来す種々の疾患に対しては、従来のアテロコラーゲンに加え、粘膜上皮へ線維芽細胞増殖因子（bFGF）の注入を行っている。さらに炎症性疾患にはかなり治療強度が強く、保存的治療と手術室での喉頭微細手術の中間に位置するとされるステロイド（ケナコルト®）の注入も積極的に行っているが、既報通りの強い治療強度を実感している。さらに我々の施設の特徴として喉頭乳頭腫を多く扱っているが、この疾患を中心として外来でのレーザー手術も多数行ってきた。これらの外来日帰り手術は、近年のコロナ禍において手術室での手術が制限された状況にあっても当科での施術数は増加傾向を示しており、OR to Office というパラダイムシフトを実感している。また、これらの結果を積極的に世界に発信しているが、最近の代表的な講演としては、2023年のIFOS（国際耳鼻咽喉科学会、ドバイ、Round Table “Paradigm shift in phonosurgery”）、2020年のEACP（東アジア音声外科学会、嘉義、Keynote Lecture “From developing to developed laryngeal /voice clinic in one university hospital”）、2019年のIAP（国際音声外科学会、ブエノスアイレス、invited speaker “Office-based green laser surgery for laryngeal papillomatosis”）などがある。

本講演では、音声障害に対する、低侵襲で効果的な上記治療について、症例を交えて概説する。喉頭微細手術や喉頭枠組み手術が不必要になることは当然ないと思われるとはいえ、大きな転換期を迎えている音声障害の治療について、聴講者が学ぶ一助となれば幸いである。

略 歴

[学歴・職歴]

平成7年3月 慶應義塾大学医学部卒業
平成7年4月 慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科学 入局
平成15年7月 ジョンスホプキンス医科大学耳鼻咽喉科 Visiting scientist
平成17年1月 ペンシルベニア大学医学部耳鼻咽喉科 Research fellow
平成18年6月 慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科学
病院臨床助手・喉頭部門責任者
平成18年7月 同上 助手
平成19年4月 同上 助教
横浜市立大学医学部医学科生理学 非常勤講師
平成21年4月 慶應義塾大学医学部 専任講師
平成26年9月 同上 准教授
平成27年4月 杏林大学医学部耳鼻咽喉科学 主任教授
慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科学 非常勤講師
平成30年3月 臨床福祉専門学校言語聴覚療法学科 非常勤講師
令和2年4月 慶應義塾大学医学部 客員教授(耳鼻咽喉科学)
現在に至る

[主な所属学会及び役職]

日本耳鼻咽喉科学会(代議員・総務部調査委員会委員・専門医試験委員・査読委員(含ANL))
日本耳鼻咽喉科学会・東京都地方部会(代議員・代議員会副議長・支部長・幹事)
日本小児耳鼻咽喉科学会(将来計画担当理事・学術国際担当副理事・査読委員)
日本気管食道科学会(認定医・財務担当常任理事・専門医試験委員会委員・総合将来計画委員会委員・ガイドライン・マニュアル委員会委員・ホームページ委員会委員・日本医学会連絡委員・査読委員)
日本喉頭科学会(倫理副担当理事・会報編集委員・査読委員)
日本音声言語医学会(音声言語認定医・会報編集担当理事・学術企画委員会委員長・音声情報委員会ガイドラインWG構成員・査読委員)
日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会(評議員)
日本嚥下医学会(評議員)・日本頭頸部外科学会(評議員・査読委員)
耳鼻咽喉科臨床学会(運営委員・査読委員)・日本口腔・咽頭科学会(評議員)
環太平洋外科系学会—日本支部会(評議員)
日本口腔外科学会・日本耳科学会・日本癌学会
The Voice Foundation (Professional member, Vice president of Japan chapter)
米国癌学会 (American Association for Cancer Research, active member)
RRP (recurrent respiratory papillomatosis) task force, member など

[公的活動]

医療研修推進財団 言語聴覚士国家試験 幹事・試験委員
日本医療安全機構 関東ブロック個別調査部会員(咽喉頭科学領域)
世田谷区医師会 生涯教育・医学会実行委員
公益社団法人銀鈴会 名誉会員
認定特定非営利活動法人悠声会 特別会員
公益財団法人国際耳鼻咽喉科学振興会(SPIO) 選考委員

アレルギー性鼻炎治療の進歩

大久保公裕（日本医科大学大学院医学研究科頭頸部感覚器科学分野）

現在、花粉症を含むアレルギー性鼻炎の治療には多くの抗ヒスタミン薬が頻用されている。これは2020年版鼻アレルギー診療ガイドラインでの「花粉症における治療法の選択」の項目でもその重要性が書かれ、くしゃみ・鼻漏型を中心にほとんどすべての重症度に使用が勧められている。新規の副作用を減じた構造の異なる抗ヒスタミン薬がここ20年で多く出現した。今回はそのエビデンスを整理し、その使用の方法論について考えてみる。

また舌下免疫療法（SLIT）は、1986年に Scadding GK によって通年性アレルギー性鼻炎に対して初めて報告された。我々は日本医科大学倫理委員会の承認を得て、2000年からスギ花粉症に対する SLIT open study を実施した。2004年厚生労働省の免疫学的疾患克服研究事業の一環として、スギ花粉症に対する SLIT の二重盲検比較試験を行い、2005年にはスギ花粉の飛散が多い時期のスギ花粉症に SLIT が有効であることを発表した。スギ花粉症に対する SLIT の有効性は明らかであり、さらに錠剤タイプの SLIT を3年間投与した後の実薬に対する後影響を二重盲検比較試験で報告し、試験終了後に IgE と IgG4 に差があることを明らかにした。これらの抗体の産生について、さらなる検討が必要である。

1991年に $Fc\epsilon$ 受容体 I の受容体である $C\epsilon 3$ に特異性を有するヒト化モノクローナル抗体 ruMAbE25（Omalizumab）が開発され、現在すでに重症気管支喘息、重症蕁麻疹に世界的に適応がある。スギ花粉症に対するオマリズマブの臨床試験は2002年に開始され、2018年には、既存治療薬に抵抗性を示す重症スギ花粉症に対する臨床試験が実施された。抗ヒスタミン薬と鼻噴霧用ステロイドにより、症状が残る重症スギ花粉症患者さんの鼻症状および眼症状のスコアがプラセボよりも有意に改善され、オマリズマブの重症花粉症に対する2019年の適応取得につながった。今後も、新しい治療法開発で一般臨床の場に寄与できるよう研究を進めていく。

学歴および職歴

昭和59年3月 日本医科大学卒業
昭和59年5月 第77回医師国家試験合格
昭和63年9月 日本医科大学大学院（耳鼻咽喉科）卒業
昭和63年10月 日本医科大学耳鼻咽喉科助手代理
平成1年7月から平成3年9月 米国国立衛生研究所（NIH, NIAID）アレルギー部門 留学
平成2年8月 日本耳鼻咽喉科学会認定医
平成3年10月 日本医科大学耳鼻咽喉科助手
平成5年4月 日本アレルギー学会認定医
平成5年10月 日本医科大学耳鼻咽喉科講師
平成7年4月 日本アレルギー学会専門医
平成7年4月から平成10年3月 厚生省難病疾患アレルギー総合研究 花粉症研究 分担研究者（3年間）
平成11年4月 日本アレルギー学会指導医
平成11年4月 環境庁花粉症保健指導マニュアル作成委員 現在まで
平成11年4月 東京都花粉症対策検討委員 現在まで
平成11年4月から平成14年3月 厚生省感覚器障害およびアレルギー等研究 花粉症に対する各種治療法に関する科学的根拠を踏まえた研究 分担研究者（3年間）
平成12年4月 日本医科大学耳鼻咽喉科助教授（准教授）
平成12年4月から平成14年3月 厚生省医療技術評価総合研究 アレルギー性鼻炎の科学的根拠に基づく医療EBMによるガイドライン策定に関する研究 分担研究者（2年間）
平成14年4月から平成17年3月 厚生省感覚器障害およびアレルギー研究 花粉症の各種治療法のQOL評価と新しい治療法開発の基礎的研究 主任研究者（3年間）
平成16年4月 日本アレルギー学会代議員
平成17年4月から平成20年3月 厚生労働省免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 リアルタイムモニター飛散数と現状の治療によるQOLの関連性の評価研究と花粉症根治療法の開発 主任研究者
平成19年4月 日本アレルギー学会理事
平成20年4月から平成22年3月まで 厚生労働省免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 リアルタイムモニター花粉数の情報のあり方の研究と舌下ペプチド・アジュバント療法の臨床研究 主任研究者
平成22年4月 日本医科大学耳鼻咽喉科学講座主任教授
日本医科大学大学院医学研究科頭頸部・感覚器科学教授
平成23年4月 環境省「微粒子状物質等疫学調査研究検討会」委員 現在まで
平成23年4月 Editorial Boards, Allergy, Asthma, Clinical Immunology
平成23年4月 Editorial Boards, Advances in Otolaryngology
平成23年4月 Editorial Boards, Allergy
平成24年4月 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事
平成26年4月 日本鼻科学会理事 令和1年12月まで
平成31年2月 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事長 令和2年12月まで
令和3年4月 Associate Editor, Frontiers in Allergy

[学会役員]

日本アレルギー学会理事、耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会理事、日本耳鼻咽喉科学会代議員、日本アレルギー学会評議員、日本鼻科学会評議員、日本耳鼻咽喉科臨床学会運営委員

[賞罰]

平成6年度 東京都医師会医学研究賞 奨励賞受賞
平成7年度 内視鏡医学研究振興財団 研究助成受賞

新型コロナウイルス感染症：現状と今後

宮坂 昌之（大阪大学免疫学フロンティア研究センター招へい教授・大阪大学名誉教授）

新型コロナウイルス感染症による重症化率、死亡率が最近大きく低下してきたが、その原因の一つが広範に行われてきたワクチン接種である。なかでも mRNA ワクチン接種は感染リスクを有意に下げ、重症化を強く抑制する。実は、mRNA ワクチン開発の歴史は今から 10 年以上前にさかのぼる。日本には到来しなかった感染症 MERS の勃発の頃（2012 年）から開発が続けられていた。mRNA ワクチンは筋肉内に投与された後、リンパ管を介して所属リンパ節に運搬され、そこで主に樹状細胞などの抗原提示細胞に取り込まれ、自然免疫と獲得免疫が発動する。そして複数回接種後には所属リンパ節でメモリーが生じる。ここでは mRNA ワクチンの作用機序をリンパ系との関連から解説するとともに、現在の mRNA ワクチンの問題点（＝改善を必要とする点）についても触れる。ワクチンは健康人を対象とすることから、極めて高いレベルの安全性が求められるが、ワクチン接種開始後から現在に至るまでワクチン接種者群と非接種者群の間では死亡率に有意な差はない。また、ワクチン接種を受けた妊婦に不妊、流産、奇形は増えていない。ワクチン接種で免疫力が下がるというのも間違いである。一方で、新型コロナの感染症法上の扱いを現在の「2 類相当」からインフルエンザ相当の「5 類」への引き下げにより日本におけるもろもろの問題が解決されるのか？話はそれほど簡単ではない。本講演では、新型コロナ感染症やワクチンに関する誤解について解説するとともに、これからの新しい感染対策や今後の流行の見通しにも触れる予定である。

略 歴

現 在：大阪大学免疫学フロンティア研究センター招へい教授、大阪大学名誉教授。
医学博士・PhD。

1947年 長野県上田市生まれ。

1973年 京都大学医学部卒業、

1981年 オーストラリア国立大学大学院博士課程修了。

その後、金沢医科大学血液免疫内科、スイス・バーゼル免疫学研究所、東京都臨床医学総合研究所を経て、大阪大学医学部教授、同・医学研究科教授を歴任。

2007年～2008年 日本免疫学会会長。

2013年～2018年 フィンランド学士院招へい教授。

著書に『標準免疫学』（医学書院）、『免疫と「病」の科学』、『免疫力を強くする』、『新型コロナ7つの謎』（いずれも講談社ブルーバックス）、『新型コロナワクチン本当の「真実」』、『新型コロナの不安に答える』（いずれも講談社現代新書）

Auditory Neuropathy (Auditory Nerve Disease) ～1996年の発見報告から現在に至るまでの国内外展開と新たな取り組み～

加我 君孝 (国立病院機構東京医療センター・臨床研究(感覚器)センター、神尾記念病院)

本疾患 (AN) は 1996 年に Starr ら、演者らのそれぞれのグループが独立して同時に成人症例を中心に報告した。この病態は蝸牛有毛細胞の機能検査 (蝸電図あるいは OAE) は正常であるのに対し、脳幹聴覚伝導路の機能検査 (ABR) に異常 (無反応) がみられることを主徴とする。成人の典型的 AN 症例における聴力像は低音障害型を示し、高音域聴力は軽度から中等度の損失にとどまる一方、語音明瞭度には個人差があり著しい障害例も多い。共通して OAE 正常、ABR 無反応を呈する。病態生理は①シナプス前の異常 (内有毛細胞側)、②シナプス後の異常 (蝸牛神経側)、③蝸牛神経そのものの異常の場合が考えられている。遺伝子変異については *OTOF*、*OPA1* の他、脊髄小脳変性症や Charcot-Marie-Tooth 病が関与する症例が報告されている。

2008 年、米国のコロラド小児病院のグループは auditory neuropathy spectrum disorder (ANSD) という小児 ANSD ガイドラインを提示した。この先天性 ANSD は、新生児聴覚スクリーニング後に OAE 正常かつ ABR 異常 (①各ピーク消失、② I～III 波以降のピーク消失、③波形の同期不良かつ高刺激レベルでのみ明確な V 波反応がみられる 3 パターンのいずれか) を示した乳幼児を包括する疾患概念と説明されている。演者は臨床上の混乱を避けるべく、先天性 ANSD を長期経過の観点から 3 タイプに分け、さらにその下位分類を提案した。演者の長期経過による研究では 3 タイプのいずれも新生児聴覚スクリーニング後の初期検査では OAE 正常、ABR 異常を示すが、その後が異なる。①タイプ I はその後の成長とともに ABR が正常化し (ABR I、II 波以降の異常が正常化する例も含む)、②タイプ II はその後に OAE が消失して重度感音難聴の所見に変化する。③タイプ III は OAE 正常、ABR 異常の乖離症状のまま成長するが日常会話における語音弁別能の障害の有無によってさらにサブタイプ (a と b) に分類される。タイプ III-a (真性 AN) は語音弁別能が低く人工内耳 (あるいは補聴器) が必要であるのに対し、タイプ III-b (偽性 AN) は語音弁別能が良好で補聴器も人工内耳も不要である。その後この分類も当てはまらないサブタイプも発見されている。

略 歴

昭和46年3月 東京大学医学部卒業

昭和61年3月～平成3年12月 帝京大学医学部助教授（耳鼻咽喉科学）

平成4年1月～平成19年3月 東京大学医学部教授（耳鼻咽喉科学）

平成12年4月～平成19年3月 東京大学医学教育国際協力研究センター長

平成16年9月～平成20年8月 日本耳科学会理事長

平成19年4月～平成22年3月 独立行政法人国立病院機構東京医療センター・臨床研究（感覚器）センター長

平成19年5月～ 東京大学名誉教授

平成20年10月～ 獨協医科大学医学部特任教授

平成21年4月～ 平成30年3月 目白大学客員教授

平成22年4月～ 独立行政法人国立病院機構東京医療センター・名誉臨床研究（感覚器）センター長

平成23年4月～平成26年3月 国際医療福祉大学三田病院教授（耳鼻咽喉科）

平成26年4月～平成31年3月 国際医療福祉大学教授、国際医療福祉大学言語聴覚センター長

平成27年6月～ 日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会東京都地方部会長

平成31年4月～ 神尾記念病院 顧問

平成元年12月～ 公益財団法人颯田医学奨学会理事長

令和3年6月～ 神尾記念病院 聴覚クリニック

令和4年6月～ 公益財団法人国際耳鼻咽喉科学振興会理事長

講演要旨広告掲載企業一覧

杏林製薬株式会社

クラシエ薬品株式会社

サノフィ株式会社

塩野義製薬株式会社

セオリアファーマ株式会社

大鵬薬品工業株式会社

田辺三菱製薬株式会社

デマント・ジャパン株式会社 ダイアテックカンパニー

株式会社ツムラ

日本新薬株式会社

東日本メディコム株式会社

マキチエ株式会社

Meiji Seika ファルマ株式会社

リオン株式会社

(50音順)

医療機械展示一覧

アニマ株式会社

株式会社近藤研究所

株式会社精研

第一医科株式会社

永島医科器械株式会社

ニスコ株式会社

株式会社 Parafeed

東日本メディコム株式会社

HOYA 株式会社

マキチエ株式会社

株式会社モリタ製作所

リオン株式会社

(50音順)